遺族からの投稿

ミャンマー慰霊友好親善訪問に参加して

広島市南区　八林　脩

広島県・広島市遺族会のお世話により慰霊友好親善訪問する事が出来、遺児として貴重な体験をさせて頂き大変感謝しております。今度の日程は次の様に行われました。

＊二〇〇五年十二月一日
午後一時から東京九段会館で説明会の後団結式があり、後靖国神社参拝をすませ夕食会（壮行会）が行われる。
慰霊友好親善訪問団員八〇名、戦跡慰霊巡拝団員一九名、各団長添乗員を含め総勢一一一名でA・B・C・D・E班に分かれ、私はD班で二一名の遺児と一緒に巡拝。

＊二〇〇五年十二月二日
成田空港よりバンコク経由でミャンマーの首都ヤンゴンに到着。夜七時過ぎホテルに着く。岡山の遺児の浦上さんと同室。

＊二〇〇五年十二月三日
ヤンゴン空港から国内線でアキャブに昼過ぎに到着。ホテル近くのシワトウエイ海岸で五遺児（E班一名）の慰霊追悼を行う。

＊二〇〇五年十二月四日
午前中日本遺族会が創ったバンドウダトウ小学校を慰問し、持参したノートや鉛筆を届け午後の国内線でヤンゴンに戻る。

＊二〇〇五年十二月五日
早朝五時ホテル出発、国内線でマンダレー空港へ。そこからチャーター便でカレミョー空港へ行きトラックを改造した専用バスでカレワ迄ガタガタ道を行く。ここでは一五名の遺児の追悼式が行われ、同室の浦上さんも追悼され、夜遅くホテルに帰る。

＊二〇〇五年十二月六日
カレミョーからマンダレーに昼過ぎに着き、サガインヒル日本人墓地で私と平田さんの二人の遺児で追悼式が行われる。マンダレー市内で花や果物等を買って、日本から持参したお酒も供える。

＊二〇〇五年十二月七日
午前中マンダレー周辺の日本人墓地の慰霊巡拝をし、午後ヤンゴンへ向かう。

＊二〇〇五年十二月八日

ヤンゴンの日本人墓地で現地日本大使官の出席の上、五班合同の全戦没者の追悼式が行われる。その後ホテルで大使官ミャンマー教育者関係の方々と懇親会が開かれる。
後夜空路バンコクへ向かう。

＊二〇〇五年十二月九日
バンコク市内からバスでカンチャナブリの日本人墓地等の慰霊巡拝をする。

＊二〇〇五年十二月十日
昼前にバンコク空港より成田空港へ。全員無事帰国、解団式を済ませ解散する。

今回の慰霊友好親善訪問に際して、日本遺族会の方々のおかげで、父の所属部隊や当時の戦地の行動記録等、父の戦死したであろう場所も知ることが出来ました。父はサガイン州のセジで戦死した様で、サガインヒル日本人墓地での巡拝となりました。ここでは私達二人だけの追悼式でしたが、二一名全員で祭壇を設営し、それぞれ皆日本から持参したお酒やタバコ・お菓子等供えてくださり、盛大に追悼式を行うことが出来ました。

この大戦では、戦争末期には食糧も無く追撃する敵の爆撃を避けつつ、体力消耗の中疫病や病魔と戦いながらジャングルをさまよった事など、本で読んだ事が頭の中に浮かびました。追悼の後サガインヒル日本人墓地は陽が落ち始め、夕陽がとてもきれいでした。そこで私達全員で歌った「ふるさと」は皆涙がこみ上げ止まりませんでした。

現在ミャンマーは軍事政権下ですが、ミャンマーの大戦（ビルマ）で遺児となられた人達に一人でも多くこの様な体験をさせてあげて欲しいと心より思います。また、ミャンマーの人達は日本人に対してとても温かく接してくれ、安心して行く事が出来ます。

機会があればまた行きたいと思います。本当にありがとうございました。

トラック、パラオ諸島慰霊の旅

福山市駅家町　小泉　正

この度十月十三日より十月十九日間七泊八日の日程でトラック、パラオ諸島慰霊友好親善訪問団に参加させて頂き、私の七十年の人生の中で一番心に残る旅でした。

これもお互いに戦後の苦しい時代母を助けて生活した同志の方々ばかりの旅行で、お互いに助け合い慰め合い、私達十名は、パラオ諸島を廻らさせて頂きました。

島々の所々又海上では、船の上にて、それぞれ、お父様の亡くなられた場所にて、祭壇を設け、慰霊祭をとり行わさせて頂きました。

その都度、亡き父に追悼文を読ませて頂き、お互いに読まれる追悼文は、父を思い、母を助け、兄弟、姉妹を労るお言葉は、口には言い表す事の出来ない文章で、口より語られるお声は、森羅万象一切が感動し、同情の涙をしてくれているようでした。

島々に残る船、戦車の残がいを見ると昔を思い出し、無い所では美しい島に、又島々の人々の方々も人なつこく、ペリリュー島小学校訪問では、日本語で「もしもしかめよ、かめさんよ」の童謡を歌って下さり、とても親しみを覚えさせて頂きました。

この度、亡き父等の眠る戦没値に参らせて頂き、亡き父と充分お話しが出来たように思われました。

これも日本遺族会、厚生労働省、ご支援の賜物と心よりお礼申し上げます。

「ボルネオ慰霊友好親善訪問団」参加報告書

広島市東区　垣内田　郁代

戦後六十年という節目の年に当る今秋。先の大戦及び戦後において、祖国のために尊い命を捧げられた靖国の英霊を慰霊するため、日本政府事業、日本遺族会、広島県遺族会、広島市遺族会、株式会社小田急トラベル、その他多くの方々の温かい励ましと、ご支援により、始めての海外への不安を胸に慰霊巡拝の旅に出発した。

全国から参加した遺児の二十二名は、ボルネオ島のマレイシア側を北廻りに巡拝するA班と、インドネシア側を南廻りに巡拝するB班に分かれ巡拝の旅が始まった。

「欲しがりません、勝つまでは」と、耐久精神を国民学校でたたき込まれた軍国少年少女たちは、「銃後を守れ」と遺言した亡父の遺志を胸に、父亡き後の戦後を祖父母、母、幼い弟妹を助け、厳しい時代に、甘える事も許されず、六十年という歳月を生き抜き、今では、還暦や古希を迎え、白髪も増え、子や孫に囲まれ、やっと肩の荷をおろした者同志、打ち解けるのに時間は不用。互いに助け合い、励まし合って、午前四時起床の日もある、厳しいスケジュールの慰霊の旅が続いた。

航空機の乗継ぎ七回。出入国八回。セレベス海の荒海の真中で、エンストを起し、木の葉のように揺れる小さな船での旅。四一〇四メートルのキナバル山中腹のジャングルの間も走る、七時間近いバスでの移動。

旅行者の姿は、一人も見当たらない、現地人だけ住むバリクパパンの山村に、訪づれる者もなく、淋しくたたずむ、亡き父の慰霊碑の前では、日本は戦後めざましい発展を遂げ、今では世界のすみずみまで行く事が出来る時代になったにもかかわらず、墓参が今日に至った事を深く詫び、悲しい時、苦しい時、淋しい時には、靖国の英霊を父にもつ誇を胸に、「親の無い子」と、世間から後指を差されないように、世の中のお役に立てるようにと、苦難の道を一山一山越えてきた事を報告し、遺された人生を、誰かのためにお役に立てるよう、微力を尽くす事を誓った。

屍で埋め尽くされたパギナタンの川原では、サンダカンを出発する時には、一、〇〇〇名いた大隊が、五〇〇キロにわたるジャングルの道無き道を行軍中、糧秣は不足し、飢餓を疾病のため目的地に着いた時には、わずか十数名になっていたという事を知り、流木や小石を集めて国旗を立て、供物・供花のもと、般若心経を読誦し、菊の花を川面に浮かべ、赤道直下の炎暑の下、滴り落ちる汗と涙。流れ行く菊の花をいつまでもいつまでも見送り、幾多の英霊の冥福を祈ると共に、戦争の悲惨を語り継ぐ使命を自覚した。

最後に、A班七ヶ所、B班四ヶ所の慰霊巡拝の旅を終えた参加者全員が、ラブアン平和公園にある「ボルネオ戦没者の碑」の前で、ボルネオ地域及び海域の「全戦没者追悼式」wp終え、世界各地で実施されている当事業を未参加の遺児の皆さんに周知徹底する事を胸に誓い帰国の途についた。

以上

末筆になりましたが、慰霊巡拝のお世話になりました。日本政府を始め、日本遺族会、広島県遺族会、広島市遺族会、株式会社小田急トラベル、各国の旅行業者、参加者の遺児の皆さま方に、衷心より厚く厚くお礼申し上げます。

慰霊の旅

平成十七年慰霊の旅を終えて

尾道遺族会　福島　弘

寒さもゆるみはじめた、三月の中旬、中国慰霊友好親善訪問団の一員として参加し、積年の思ひをかなえることが出来ました。全国から四十五名参加され、それぞれ戦没地域が異なる為、ABCの三班に班別され、私はA班十八名の一員に、総括団長、森田次夫、「日本遺族会副会長」ほか「団長補佐」、添乗員とで二十一名がグループとして最後迄ご一緒させていただきました。靖国神社に参拝し慰霊の旅の思いを誓い、成田発十時四十五分空路、中国に向って飛び立ちました。現地時間十二時四十五分、上海浦東国際空港に着陸、夢に見た父の眠る中国の地に一歩を印した。ここで各班は別行動となり、A班は森田団長に引率され、ここで現地ガイド二名で、バスにて早速足跡を巡る慰霊の旅が始まる。最初の目的地、